

村の鍛冶屋さん

展示解説リーフレット

0. はじめに

近所のホームセンターに行けば、どんな道具でも簡単に手に入る。そんな現代とは異なり、高度経済成長期ごろまでの地域の暮らしは、大工・左官・鍛冶といった様々な職人の存在によって支えられていました。

これまでの展示では、地域の経済的中心地であった坂戸宿^{さかどしゆく}で活躍した職人たちについて度々紹介してきましたが、周辺の農村部における職人の活動についてはあまり紹介する機会がありませんでした。町場にはたくさんの人や品物が集まりますが、それらの多くは周辺の農村からやって来ます。つまり、町場と農村は表裏一体の存在であり、坂戸宿の歴史を明らかにする上でも、周辺の村々についての理解は欠かせません。

そこで本展示では、かつて小山地区^{こやま}で操業した鍛冶屋道具を一挙に公開し、その仕事内容に迫ります。また、絵図や発掘調査の成果を通して、江戸時代から戦前頃までの入西の村々の様子について紹介します。本展示を通して、かつて坂戸の大部分を占めた農村の姿について、皆様に関心を持っていただければ幸いです。



図1 坂戸市のなかの入西地域と小山地区 (国土地理院による地理院地図HPより引用・加筆)

1. 鍛冶屋の仕事場から

ここで展示しているのは、かつてこやま小山地区でそうぎよう操業していたかじや鍛冶屋の仕事道具一式です。

この鍛冶屋が操業した年代や具体的な生産品の種類については、残念ながら資料が伝わっておらず正確なことは分かりません。しかし、残された道具の種類を調べたり、他の資料を調べたりしてみたところ、おおよその年代や仕事内容が分かってきました。それによると、明治45年(1912)までに操業をはじめ、第二次世界大戦中の昭和17年(1942)にはすでに廃業していたようです。また、生産していたのはちようどひん調度品のかざりかなぐ飾金具などの比較的小さな品物が多かったようです。

展示にあたって、残された道具の種類や使用法についても可能な限り調べました。調べてみると、一般的な鍛冶屋であれば持っているはずの道具が無かったり、少なかったりと、どうやら全ての道具が寄贈されているわけではないことも分かってきました。一方で、ふいごハシやつち鑿といった鍛冶屋として必要最低限の道具は良好な状態で残されており、かつての鍛冶屋の仕事場を思い描くことができます。



ふいご
鑿

火をおこすための炉に風を送る道具。
取手を押し引きして動かすと、箱の中の空気が圧縮されて側面の小さな穴から強い風が出てくる。

金床石の上にすえた鉄素材を、伸ばしたり整形したりするために叩く道具。

ハンマー (つち鑿)



様々な製作品

カタログがわりの見本用か。
飾金具や造園用金具が多い。



鉄素材をつかむ道具。

つかむ素材の大きさや厚みに合わせて、
様々な形に作られる。

ハシ

図2 鍛冶屋の基本的な仕事道具たち

操業の年代を探る

小山地区の鍛冶屋が操業したのは、一体いつ頃のことでしょうか？

情報がほとんど無いなか、以下のような観点を手掛かりに探ってみました。

ヒント① 道具の年代を調べる

道具の中には、製作した年代や製作者の名前が記してあることがあります。メーカーや型番も年代決定のヒントになります。

展示している道具を調べたところ、残念ながら墨書や陰刻は見られませんでした。唯一、鉄製の万力に「REG TRADE MARK」という商標や、商品名・型番が見つかりましたが、製作された年代やメーカー名などは特定できませんでした。残念！

ヒント② 地誌類で情報を探す

江戸時代以降、地域の地理・名所などをまとめた地誌が各地で作成されました。その中で、鍛冶屋の情報を探してみましょう。

調べてみたところ、明治45年（大正元年）に入西尋常高等小学校で編さんされた『入西郷土地誌稿』の内容に、当時の入西村の産業について「鍛冶業 戸数1 人員6」と記録されているのが見つかりました。

これはかなり有力なヒントです。

表1 地誌類・組合名簿に記録された入西村の鍛冶屋

地誌名	刊行年	記載	その他
武蔵国郡村誌	明治9 (1876)	×	片柳・粟生田で鎌の生産
埼玉県堂業便覧	明治35 (1902)	×	農村部の記載なし
入西郷土地誌稿	大正元 (1912)	○	鍛冶業1 戸数1 人員6
入間郡誌	大正元 (1912)	×	手工業についての記載なし
野鍛冶工業小組合名簿	昭和17 (1942)	×	坂戸・片柳には鍛冶屋あり

ヒント③ 同業組合の記録を調べる

商工業の規模拡大に伴って、様々な同業組合が作られました。組合では、地域ごとに組合員の名簿を作っていることがあります。

戦時中の昭和17年（1942）に、物資配給のために作られた埼玉県の野鍛冶工業小組合の名簿を見ると、入西村を拠点にした組合員はいませんでした。この頃には、入西の鍛冶屋は廃業していたようです。

これらのヒントをもとにすると、明治45年（1912）までに操業をはじめ、昭和17年（1942）までには廃業、という鍛冶屋の操業年代が見えてきます。

同時代の近隣の鍛冶屋の動向を見ると、明治期に川越の鍛冶屋で修業したのちに独立し戦時中に廃業する、といった事例もあり、この鍛冶屋も同じようなあゆみを経たと考えられます。

2. 暮らしを支える鍛冶

鍛冶屋^{かじや}とひとくちに言っても、刀鍛冶^{ていてつ}や蹄鉄^{ていてつ}鍛冶^{ていてつ}といった「専用鍛冶」と、様々な製品を手掛ける「野鍛冶」に分けられます。町場・農村を問わず人々の暮らしを支えた野鍛冶はいわゆる「何でも屋」で、鎌^{かま}・鋏^{はさみ}・取手^{たんぞう}などの暮らしに必要な鍛造製品であれば手広く手掛けたほか、要望に応じて農具の補修なども行っていました。

野鍛冶は、地域によって得意な品物が異なっていることも特徴のひとつです。例えば、埼玉県内でも山林や丘陵が多い地域では、鉈^{なた}・山刀^{やまがたな}などの山道具を作る鍛冶屋が多かったほか、お茶どころの狭山^{さやま}周辺では茶刈り用の鋏が盛んに作られていたようです。また農具を作るときは、使う土地の性質によって刃先の形や地金の厚さなどをきめ細かく調整していました。

どんな道具も手軽に購入できる現代と違い、比較的貴重であった鉄製品を大切に使うをえなかった昔の人々にとって、村の野鍛冶は心強い存在でした。ここでは、人々の暮らしに寄り添った野鍛冶の多彩な仕事内容について、坂戸市域の道具を中心に紹介します。

※1 蹄鉄 … 馬の蹄を保護するための道具。鉄製のU字状で蹄に打ち付けて使う。

金属をめぐる技術、いろいろ

鉄を扱う金属生産・加工の技術としては、鍛冶のほかにも製鉄^{せいてつ}・鑄造^{ちゅうぞう}・彫金^{ちようきん}などがありますが、これらにはどのような違いがあるのでしょうか。

まず、金属を生産する技術である「製鉄」と、そこから生み出された金属を加工する技術である「鍛冶」「鑄造」「彫金」などに分けることができます。日本では海や川で採れる砂鉄^{さてつ}が盛んに利用されてきました。

本展示のテーマとなっている「鍛冶」は「鍛造」とも呼ばれ、鉄を叩いて形を作る技術のことを指します。包丁・鋏や農具の刃先といった日常的に使うほとんどの刃物は、鍛造によって作られています。

これに対して「鑄造」は、金属全般（鉄・銅・金銀など）を溶かして形を作る技術を指し、鍋や釜のほか、じつは貨幣も鑄造によるものです。溶かした金属を流し込む「鑄型」を使うのが特徴で、同じ形の製品をいくつも作るのに向いています。坂戸市の金井遺跡^{かない}（新堀^{にいほり}地区）では、鎌倉時代の大規模な鑄物工房の跡が発見されており、梵鐘^{ぼんしょう}をいくつも生産していたことが分かっています。

「彫金」は、鍛造・鑄造で作られた製品に模様を刻んだりメッキをかけたりする技術を指します。調度品の飾金具^{ちようどひん}やアクセサリ^{かざりかなぐ}の製作には欠かせない技術です。

これら3つの加工技術は、鎌倉時代頃にはすでに別々の技術として成立していました。様々な職人を描いた「職人歌合^{しよくにんうたあわせ}」と呼ばれるジャンルの絵巻^{えまき}には、それぞれの職人たちが「鍛冶」「鑄物師」「銅細工^{あかがねざいく}」などの名前で登場しています。

3. 入西の村々のすがた

ここでは、江戸時代から戦前頃にかけての絵図を通して、鍛冶屋が操業したころの地域の様子を探っていきます。

現在の坂戸市のかたちは、いち早く町制を施行した坂戸町と、三芳野村・勝呂村・入西村・大家村が昭和29年（1954）に合併して新・坂戸町となったことで誕生したものです。その際に合併した各村も、明治22年（1889）に町村制が施行されるまでは、江戸時代以来のさらに小さな村に分かれていました。このような村の領域は、おおむね現在の「大字」の範囲に対応していますが、農地・道路の整理や河川の変動によって、村のかたちに変化している部分も見られます。絵図を見比べて、堀込村（堀込地区）や峯村（北峰地区）の変化をご覧ください。

また発掘調査の成果から、江戸時代以降の村の暮らしの様子も少しずつ分かってきました。西浦遺跡53区（新堀地区）では、土地を区画する溝に陶磁器をまとめて捨てた様子が発見されました。なかには遠く八王子から運ばれてきたものもあり、当時の村で生産された品物をめぐる人々の移動が垣間見えます。

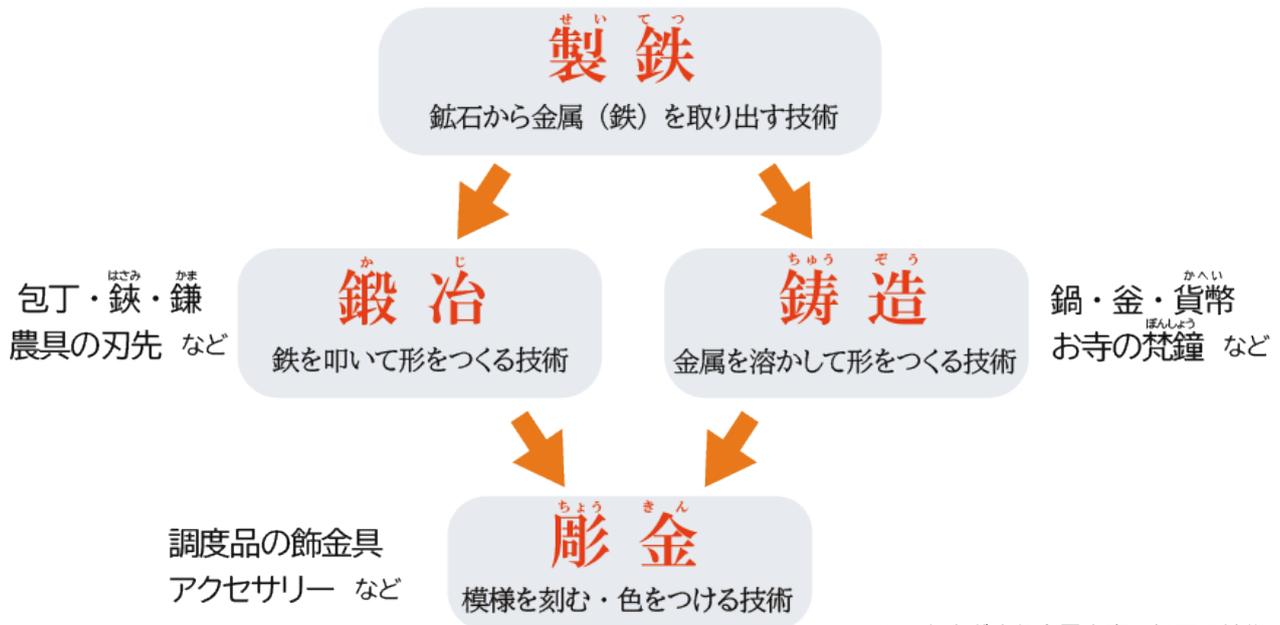


図3 さまざまな金属生産・加工の技術



図4 『東北院職人歌合絵巻』に登場する鍛冶

色々の職人が和歌で勝負をする様子を描いた、鎌倉時代の絵巻。職人のかたわらにハシや鍬といった仕事道具が描かれていますが、展示しているものとほぼ同じ形です。

(出典：国立文化財機構所蔵品統合検索システム https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/A-1399?locale=ja)



図6 昭和11年(1936)『入西村全図』
今はなき小字が網羅的に書き込まれた貴重な図

小さな盃から見えてくるもの

西浦遺跡 53 区 (新堀地区) の発掘調査で出土した、小さな盃。内側に青い釉薬で書き込まれた「角喜 八王子」とは、一体何のことでしょうか。「旅館か、料亭の名前ではないか？」と目星をつけて調べたてみたところ、実際にあった旅館の名前であることが分かりました。

旅館「角喜」は、明治32年(1899)の八王子宿(現在の JR 八王子駅の北側一帯)を描いた絵図で確認でき、少なくとも大正初期までは営業していたことが分かりました。同時に発見された、徳利や碗・皿といった陶磁器の年代とも大きなズレはなく、おおむね明治時代のもので考えて良いでしょう。

この時期、入西で生活した人が八王子まで旅をしたのでしょうか。当時の八王子は織物産業が盛んなだったので、入西で生産した生糸や織物をめぐって、人の行き来があったのかもしれませんが。想像がかきたてられます。 ※『坂戸市立歴史民俗資料館だより』第5号でも紹介した内容です。



図7 西浦遺跡 53 区で出土した盃

古代の鍛冶工房

市内の発掘調査では、古代の鍛冶工房も発見されています。近年では、花見塚遺跡^{はなみづか} 17・18区（小山地区^{こやま}）や、下山田遺跡^{しもやまだ} 2・3・4区（山田町^{やまだちょう}・八幡地区^{やはた}）で平安時代の鍛冶工房が検出されました。

意外なことに、古代の鍛冶工房からは鉄製品自体はあまり出土しません。完成された製品は工房の外に持ち出され、工房には未成品^{みせいひん}（作りかけ・失敗作）や材料しか残らないためです。わずかに残された鉄製品も、土の中で年月を経ることによって錆^{さび}の塊となり、最終的には消滅してしまうことが多いのです。出土品を見てみると、カナシキ^{かなとこいし}（金床石）や砥石^{といし}といった風化に強い石製品や、鉄を熱した際に出る鉄滓^{てっさい}*が多くなっています。

鍛冶工房として使用された建物の床面からは、高熱を受けて真っ赤に焼けた炉がよく発見されます。かつてそこで鍛冶職人たちが活動していた痕跡が、大地にしっかりと刻まれています。

※1 鉄滓^{てっさい} … 原材料の中に含まれる不純物と鉄分が混ざったもので、実際には鉄分はあまり含まれていない。ケイ素が多いとガラス質になったり、発泡するとスカスカになったりと、色々な状態のものがある。鉄分が多いものはずっしりと重たく、磁石にもくっつくことがある。



図8 花見塚遺跡 18区で発見された鍛冶工房



図9 下山田遺跡3・4区で発見された砥石・金床石
同じ砥石でも、石の種類やきめ細かさが異なっていて、作業の段階ごとに使い分けていた可能性もあります。

【参考文献・HP】

○文献など

- 赤熊浩一 1994 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 146 集 金井遺跡 B 区』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 朝岡康二 1998 『もの与人間の文化史 85 野鍛冶』法政大学出版局
- 大井町立郷土資料館 2002 『大井町立郷土資料館収蔵資料目録 田中家鍛冶用具』
- 角田徳幸 2019 『たたら製鉄の歴史』吉川弘文館
- 鎌ヶ谷市郷土資料館 2012 『絵図と地図でみた鎌ヶ谷の 400 年』
- 熊谷市立熊谷図書館 2021 『絵図に見るくまがや』
- 国立歴史民俗博物館 2013 『時代を作った技—中世の生産革命』
- 埼玉県立民俗文化センター 1985 『埼玉県立民俗工芸調査報告書第 3 集 埼玉の鍛冶』
- 埼玉県立民俗文化センター 1987 『埼玉県立民俗工芸調査報告書第 5 集 埼玉の桐細工』
- 坂戸市教育委員会 1978 『坂戸市史調査資料第 1 号 坂戸風土記』
- 坂戸市教育委員会 1981 『坂戸市史調査資料第 6 号 坂戸風土記』
- 坂戸市教育委員会 1987 『坂戸市史 近世史料編 I』
- 坂戸市教育委員会 1989 『坂戸市史調査資料第 15 号 坂戸風土記』
- 坂戸市教育委員会 1990 『坂戸市史 近代史料編』
- 坂戸市教育委員会 1995 『坂戸市民俗調査報告書 坂戸の民俗三 坂戸宿の民俗』
- 坂戸市教育委員会 1998 『坂戸市郷土歴史資料第 7 集 諸家文書目録 入西』
- 坂戸市教育委員会 2020 『埋文さかど年報（平成 30 年度発掘調査）』
- 坂戸市教育委員会 2021 『埋文さかど年報（令和元年度発掘調査）』
- 坂戸市教育委員会 2021 『下山田遺跡 4 区』
- 坂戸市教育委員会 2023 『坂戸市立歴史民俗資料館だより』第 5 号
- 高崎直成 2005 『文化財調査報告書第 35 集 東台製鉄遺跡』大井町教育委員会
- 東京学芸大学考古学研究室 2010 『讃岐高松藩・陸奥守山藩下屋敷跡 東京学芸大学附属竹早中学校校地内遺跡発掘調査報告』
- 日本民具学会 1997 『日本民具辞典』ぎょうせい
- 波佐見町教育委員会 2013 『くらわんか藤田コレクション—寄贈記念図録—』
- 八王子市郷土資料館 1989 『八王子宿のうつりかわり 特別展図録』八王子市教育委員会
- 八王子市郷土資料館 2011 『八王子の絵図 1 平成 23 年特別展資料集』八王子市教育委員会生涯学習スポーツ部文化財課
- 樋口豊治 1990 『江戸時代の八王子』揺籃社
- 富士見市立難波田城資料館 2004 『富士見の村絵図—描かれた村のすがた—』
- 村上隆 2007 『金・銀・銅の日本史』岩波書店

○HP など

- 国立文化財機構所蔵品統合検索システム ColBase 「東北院職人歌合絵巻」
https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/A-1399?locale=ja（最終閲覧 2023.12.27）
- 虎斑竹専門店 竹虎「ヒジツボ」
<https://www.taketora.co.jp/c/kaki/wooddoor/ka00070>（最終閲覧 2023.12.27）

坂戸市立歴史民俗資料館令和5年度下半期企画展示
「村の鍛冶屋さん」展示解説リーフレット

【発行日】令和6年1月15日

【発行】坂戸市立歴史民俗資料館

執筆・編集：学芸員 足立 とも子

〒350-0212 埼玉県坂戸市石井 1800-6

TEL 049-284-1052 FAX 049-284-1128